# 学 位 論 文 審 査 の 要 旨

| | | | |
|---|---|---|---|
| 学位申請者 | 竹家　一美<br>人間発達科学専攻　2014年度生 | 論文題目 | 現代日本における男性不妊の位置づけ<br>――当事者夫婦の語りから―― |
| 審査委員 | 主　　査:　坂本佳鶴恵　教 授 | インターネット公表 | 学位論文の全文公表の可否　：　否 |
| | 副　　査:　平岡　公一　教 授 | | 「否」の場合の理由 |
| | 副　　査:　小玉　亮子　教 授 | | □ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む |
| | 審査委員:　棚橋　　訓　教 授 | | □ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある |
| | 審査委員:　西村　純子　准教授 | | ■ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている |
| 学位名称 | 博士（社会科学）　(Ph. D. in Sociology) | | □ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている |
| | | | □ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている |
| | | | ※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について |

## 学 位 論 文 審 査 ・ 内 容 の 要 旨

日本では長年男性不妊は可視化されず、不妊に絡む問題の責めを負うのは女性とされてきた。しかし近年、男性不妊への関心が高まりつつあり、先行研究では、男性不妊が不妊男性にとってスティグマとなることが指摘されている。男性不妊は、女性を妊娠させる能力のみならず、性的能力や父性、男らしさを崩壊させるものとされている。しかし、日本において男性不妊の当事者を対象とした実証的研究はほとんど存在しない。

本論文は、男性不妊をめぐる当事者の経験をインタビューによって明らかにし、現代日本における男性不妊の位置づけを考察したものであり、従来の研究の不在を補う学術的価値の高いものである。具体的には、1.不妊症と診断された男性の語りを分析して、その不妊経験を考察する、2.無精子症患者とその妻の語りを分析して、精子採取術をめぐる当事者の身体経験を検討する、3.男性不妊の夫をもつ女性の語りを分析して、妻たちが夫の不妊とどう向き合うのかを考察する、4.当事者による男性不妊の開示状況を明らかにする、という4つの課題が設定され、調査とその内容の分析がおこなわれている。

調査は、不妊症と診断された男性8名と男性不妊の夫をもつ女性11名の計19名を対象に半構造化インタビューでなされ、男性不妊の専門医である泌尿器科医5名のインタビューも補完的におこなわれた。

調査にもとづく詳細な語りの分析の結果、以下の点が明らかになった。

1.男性不妊の当事者は「妻のため」に不妊治療を受けていた。つまり「夫婦の問題」として経験していた。また男性不妊が社会的にもっと認知され、情報が共有されることを望んでいた。

2.手術の対象は夫の身体でも、医師は患者を夫婦単位でみており、無精子症に伴う社会心理的な衝撃は妻にも影響を及ぼしていた。患者たちは、たとえ精子を採取できる可能性が低くても、より侵襲的な手術を受けることを、とりわけ妻の希望に基づいて医師に申し出ている。

3.妻たちは夫の不妊を受け止め不妊治療に取り組むとともに、夫への配慮を見せていた。彼女たちの大半は、男性不妊をスティグマとみなし、夫を「かわいそう」な存在と位置づけていた。

4.不妊は妻全員と、親の8割に開示されていた。ただし、親には部分的あるいは片方の親のみといった、何らかの情報操作がみられた。不妊男性の半数が職場の上司・同僚、親しい友人に開示していたが、相手はあまり関心を寄せないことが多い。妻のなかには、夫の男性性を守るため、親や友人に夫の不妊を隠すケースがみられた。夫にスティグマが付与されることを阻止するため、自らにスティグマを張る、ジェンダー・バイアスの再生産につながる実践もみられた。

結論として、現代日本における男性不妊は、男性にとっては必ずしもスティグマとはみなされないが、むしろ妻の問題として位置づけられること、すなわち男性個人にとっての身体の問題としてではなく、「家族形成の問題」あるいは「夫婦関係の問題」として位置づけられることが明らかにされた。

本研究は、インタビューが難しく従来なされてこなかった、不妊症と診断された男性の経験を、綿密なインタビューを用いて考察した先駆的研究であり、独創性が非常に高い貴重な業績である。分析の妥当性、結果の学術的意義も高く評価された。